一

問一　1　衝撃　2　越境　3　矛盾　4　吐露

問二　生者とともに実在していた亡き人を、自らの生の世界を拡張して取り込み、想いを向け感じられる対象として仮構するという仕方。（五九字）

問三　故人やものに関する想いなどは生者の側に過剰なほどあるのに、それらが帰属すべき当の対象が現実には存在しないという不均衡。（五九字）

問四　生きている私が亡き人を思い出し想像しようとすると、私がかつて作り上げたイメージなど簡単に打ち破っていた、故人独自の固有性が、決定的に抜け落ちてしまうということ。（八〇字）

問五　故人を想うが故人は不在だという理不尽な不均衡を解消するため、残された人は、心を故人以外に向ける喪の仕事をしたり、故人との絆を継続したりするが、故人の不在への絶望感や故人を生者の像に還元する疾しさを払拭できず、存在と不在の間で翻弄される体験。（一二〇字）

© 河合塾　2025 年

二

問一　社会における選択の善し悪しを同一の基準で計算し判定できるだけでなく、自分の研究の効用をもっとも効率的に最大化できるから。（六〇字）

問二　いずれの選択肢も十分な理由によって支えられている（二四字）

問三　ある行動を促す理由と、その行動の結果としての効用とが不可分である、ということ。（三九字）

問四　人間の最終的な選択には十分な理由があり、その理由は単一の基準では比較不能で、どの選択も合理的だから。（五〇字）

問五　社会科学者は自分個人のための効用をもっとも効率的に最大化しようとするため、公表される学術的成果が、学問的な真理や学者としての倫理を軽視しかねない、ということ。（七九字）

© 河合塾　2025 年

三

問一　イ　気づかせる
　　ニ　ひょっとすると
　　ホ　茫然自失の様子で

問二　落ちぶれて放浪し、生きることを嫌悪しつつも生き長らえている自分が、命を惜しみながら死んだ宗行の歌を他人事として見ること。（六〇字）

問三　宗行は、光親が承久の乱に連座して処刑されたことを聞き、同じ身の上である自らの死を悟ったはずだから。（四九字）

問四　今日を過ごすのもつらく思う私は、浮嶋が原に着いて、延命の望みも絶え、いよいよわが身の最期と覚悟を決めた。

© 河合塾　2025 年

四

問一　a　おいて　b　ばかり　c　もつぱら　d　しきりに　e　うたた

問二　王が設置した蟹を捕る仕掛けの中に二尺ほどの材木が入り込み、仕掛けが壊れ蟹はすべて逃げてしまっている状態。

問三　わたしを解き放たず、そのうえ自分の姓も名も言わぬ以上、わたしにはもう講じる手立てなどない。

問四　山操は人の姓名を知ればその人を傷付けることができるので、王の姓名を聞こうとした山操の言動には、自分を殺そうとする王を襲って逃げようという魂胆があった。（七五字）

© 河合塾　2025 年